（一社）東洋音楽学会東日本支部第147回定例研究会

保育唱歌の墨譜の諸本および旋律の改訂に関する考察

黒川　真理恵（お茶の水女子大学他非常勤講師）

保育唱歌は、明治10（1877）年に東京女子師範学校摂理の中村正直より宮内省式部寮雅楽課へ、同校附属幼稚園の遊戯歌および唱歌の作成を依頼されたことにより、伶人によって新作された雅楽風の唱歌である。新楽唱歌、日本唱歌、幼稚園唱歌とも言い、明治13（1880）年頃までに伶人24名と保母1名により約100曲が作曲された。当初は園児や保母に向けたものだったが、同校本科生徒の唱歌科目に採用され、明治11（1879）～18（1885）年には伶人が毎週伝習に訪れた。伝習にあたっては『東京女子師範学校唱歌教授概辨』という指導書が用いられ、楽理、歌、和琴、箏が学年順に教えられた。保育唱歌は、同校への皇后の行啓や雅楽課大演習会で園児や生徒によって歌われたり、伶人によって管絃で演奏されたりした一方で、皇后の内宴で伶人によって演奏されたり、伶人から楽家および雅楽愛好家へ墨譜の譜本が伝えられたりするなど、私的な側面もあった。

明治16（1883）年には伶人より墨譜の出版の願いが出され、そのための大幅な改訂が行われたが、公刊は実現しなかった。発表者の調査によると、改訂にあたり86曲が撰定され、そのうち約50曲に大小さまざまな改変が加えられた。改変の度合いの大きい順に、（1）別の伶人による新たな撰譜、（2）同一の調子における呂律の入れ替え、（3）遊戯歌と唱歌の入れ替え、（4）歌詞とフレーズを一致させるための旋律の一部改訂、（5）旋律のユリの省略などがあった。さらに、五声唱歌、七声唱歌、高等唱歌、遊戯の4部門に分類され、和琴譜と箏譜が付された。

保育唱歌は作曲されて以降、幼稚園などでの実践を経て形式が整えられたと考えられ、明治16年の改訂はいわば完成形と言えるが、その全容は明らかではない。そこで本発表では、墨譜の諸本の成立年代や用途を考察し、改訂をめぐる経緯を明らかにすることを目的とする。